
瞳子の日常

七崎 雨

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

瞳子の日常

【Nコード】

N0276Y

【作者名】

七崎 雨

【あらすじ】

私のうちには、変な絵がある。といっても変なのは見た目じゃないくて……『瞳子ー！オレを鑑賞しろー！』——うちの絵画、しゃべるんです……。ナルシスト病んでるっぽい絵画と、女子高生瞳子の短編連作。 拍手お礼小説のまとめです。

宿題（前書き）

ノリだけでできています！

宿題

私の家には、変な絵がある。

『おい瞳子、ちよつと小一時間オレ様の観賞をしろ！そして褒め称えろ！』

壁に掛けられた綺麗な絵が、いつものようにそうわめいた。――
言っておくけど、私の頭がおかしくなつたわけじゃない。

「い・や！あたし宿題するんだもん！3秒で我慢して！」

『なんでだよ！？見るこの美しい情景、鮮やかな色合いを！すばらしいコバルトブルーじゃないか！ああ、さすがオレ！』

たしかにフランス帰りのこの絵画は、輝きながら息をしているような青い海と、まあるい月の浮かんだ夜空がとても幻想的だ。私は絵についてはよくわからないけれど、初めてこの絵を見た時にはその青の美しさに思わず息をのんだ。――いきなり話し始めた時には、思いつきり叫び声を上げたけれど……。

こんなに神秘的な絵なのに、どうしたらそんな性格になつたんだろうか。人は見た目によらないって言うけど、それって絵にもあてはまるのかな？

『嫌だー！瞳子、オレを見ろ！オレだけを見てくれええ！』

「あーもう、昨日ちゃんと見たでしょ！わがまま！」

今日も今日とて、絵画は粘着彼氏みたいな発言をしてくる。彼は何しろ人に見られるのが大好きで、常に誰かに見つめられ、褒められていたいということなく病んだやつなのだ。多分彼は全人類が一生自分のことだけ見て生きていけばいいと思っている。ならいつそ美術館にでも行けと思うけど、母親が一目惚れして買ったかなり高価な絵らしいし、帰ってきた母親に『ああ、今日も素敵な青色！最高だわ！』と褒め称えられるのを彼も楽しみにしているようなので、取りあえずそのままにしている。

『オレの青の美しさは、シャガールをも超えるぞ！お前は恵まれた

環境にいるんだ！もつとオレを褒める！」

「絵画、怒られるよ……」

シャガールの青を見たことはないけれど（見てみたいなー、とか言ったらうちの絵画はどんな顔するんだろ）、そんな簡単に芸術を貶してはいけないとおもいまーす。

「さて、宿題でもやるとしますかねー」

「いやだ、瞳子、とうこおお！」

絵画の叫び声。これに絆されてはいけない。前に、あんまり悲しい声を出すので戻ってやったら3時間ほど観賞させられたことがあった。

『とーこー！とうこー！』

………。ほだされては、いけない。

「——はやく、宿題おわらせちゃおう……」

子供のように私を呼ぶ声を背に、私は自分の部屋のドアを開いたのだった。

ホットケーキ

「うん、我ながらおいしい」

私は自分で作ったホットケーキをぱくりと頬張った。

ホットケーキごときで作るとか言っちゃいけないかもしれないけど、私の主食はホットケーキだ。ホットケーキさえあれば生きていける。科学の限界も超えてやるぞ！

『なー瞳子、それうまいのか？』

「うん、世界で1番おいしいよ」

『オレが見たことある料理の中では3番目くらいにまずそうだぞ』

「わかってないねー。ホットケーキは全ての食材にマッチするのはちみつとかお好みソースはもちろん、ハム、チーズ、肉じゃが、納豆に漬けものだって最高の味にしてくれるんだよ？」

『そうだったのか！知らなかった、いつか食べてみたいもののリストに追加しておこう』

「え？絵画ごはん食べたいの？」

私はもごもごマグロのお刺身を頬張って聞くと、絵画は『まーな』とそっけなく答えた。

絵画はもちろん絵画なので、食べたり飲んだりはできない。どこまで感覚があるのかはちよつとわからないけど、とりあえず視覚と嗅覚はあるみたいだ。

「そっか」

……なんだかちよつと絵画が可哀そうに思えてきた。絵画がごはん食べるなんておかしいことだけど、そりゃあ目の前で毎日こんなおいしそうなもの食べられたらそう思っちゃうよね……。

「絵画……」

私が視線をやると、絵画は我慢しきれないというように息を吸って……

『だあああ！そんなことはいいから、さっさとオレを觀賞してくれ

！瞳子はなんでオレ様みたいな素晴らしい絵の横でそんなくだらな
い行為をしてられるんだ！？もっとオレを褒めろ！食い物なんてい
つでも食えるだろ！』

——え？くだらないこうい？

『この瞬間のオレは、今しか見れないんだぞ！一瞬一瞬オレは変化
していくんだ！四六時中見ている！そして褒めろ！』

それが世界の真理だ！とばかりに言い放った絵画。

——同情して損した。……人の思いを、ホットケーキを、一体な
んだと思っているんだ！

私は席を立つて、それから……

「……よいしょ」

『おい瞳子、何を、うわ、やめろー！ううえあ！』

絵画を壁から外すと、床に置いた。うつ伏せ（？）に。

『つめたい、つめたいぞ瞳子ー！』

「あ、温度感覚あったんだ」

私は再びソファに戻って、ホットケーキをぱくつと口に入れる。

うん、おいひい。

『とーこー、暗い、見えないー！とーこおお！』

「……食べ終わるまでがまんしなさい」

ホットケーキを侮辱するものは許さないぞ！子供みたいにみーみ
ー言い始めた絵画を無視して、私は食事を続けるのだった。

ホットケーキ（後書き）

読んでくださってありがとうございます！

こんなかんじでだらだらしたり、ときどき新しい子たちもでるかもしれないません。

あとこのページ、目がちかちかしないでしょうか……？

もし見にくいとかあれば（もちろんなにもなくても）、コメントいただけると嬉しいです。

拍手に新しいお話をあげたので、よろしければそちらも……（さくしゃがこつちをみているぞ！）

ねこ

『なあ瞳子ー、こいつらは何故こんなにドロドロドロドロしているんだ？』

夜、今流行っている恋愛ドラマを観ていると、絵画が不思議そうな声で言った。

「恋愛ってこういうものだからだよ。女の嫉妬は怖いって言うでしょ？」

私はそう言っただけで画面に見入る。しかしヒロインが、自分の恋人と親友のらぶらぶシーンを目撃したところで、エンドロールに入ってしまった。続きはまた来週。

「あー、ほんとに焦らすよねー。こっちの方がやきもきしちゃうよ」

私はそう言っただけで、机の上の蜜柑を食べる。この前青りんごを絵画の前で食べようとしたら、『オレはそんな色を青とは認めない！』と大騒ぎしてうるさかった。緑でも青信号だし、昔は緑も青って言うてたんだよ、と言っても絵画は『意味がわからん！青は青だ！』とまったく聞きいれる様子がなかった。本当に面倒な絵画である。

私はCMを眺めながら、ぱくりと蜜柑を口に入れる。

オレンジ色の蜜柑はよく熟れていておいしい。ちなみにすじは面倒にならない程度には取るけれど、別に付いていても気にはしない。付いてた方が栄養あるって聞いたけど、本当かな。

『ほー……そういうものか。オレには理解できないな』

「まあ私もさっぱりしてる方が好きだよ。昼ドラとか大変なことになってるときあるしね。あ、でも『この泥棒猫ー！』っていうのは1回くらい言ってみたくも」

でもやっぱりそんな展開になったらめんどくさいかなー。うーん、やっぱりいいや。お前はもう死んでいる！とかは現実にあつたらホラーだし……月に代わってお仕置きよ！とかがいいかな？そういえ

ば今の美少女ものつて素手で戦ったりすることあるよね。パンチとかキックとか。やっぱり手ぶらの相手に道具はダメってことなのか？ただでさえ敵1人对大勢とかあるし……まあどうでもいいか。『瞳子、まさか……あのぐにやつとして毛の生えただけの、にゃーにゃーうるさい奴らが好きなのか……？』

なんかゴから始まってりで終わる、黒光りするアレみたいな言い方するな……。

「そう言う意味のセリフじゃないんだけど……まあ好きだよ、猫。可愛いし」

私が言うと、絵画はくわつと顔色を変え（たぶん人間だったら、という比喻表現だけ）て、『そんなバカげた話があるか！』と大声を出した。

「あいつらがかわいいだど！？とんでもない、あんな下劣な下等生物ども！」

「……ねこちゃんバカにするんじゃない！——で、一体何されたの？」

絵画は基本的に自分のことしか興味がないので、特別何かを好きになったり嫌いになったりすることが少ないと思う。この取り乱しようは、きつと何かあったに違いない。

絵画はうおおお、と唸ってから、心底思い出さたくないとも言ように重々しく言った。

『あいつらは……オレのこの高貴なる身体に……ま、マーキングを……！』

あ、なんかわかった。

「……絵画、ちょっとお風呂場に……」

『未遂だ！かなり昔のことだしな、しかしあいつらときたら、ぐぬぬぬ……』

相当なトラウマになっているらしい。気持ちは分からなくもないけど……いやでも、私はやっぱりねこちゃんが好きだ！

「——きつとほら、猫もさ、絵画が綺麗だからマーキングしたくな

「つちやったんじゃないかな……？」

苦笑いの末に私は優しさを込めて、絵画にそう言った。絵画は少しの沈黙の後、

『お、おお、なるほどな！あいつらもなかなかわかつているじゃないか！よし、もうこわくない、こわくないぞー！』

絵画はそう言ってまた、『とーこ、オレのどこら辺がどうきれい
か具体的にいつてみる！』とかふんぞり返ったけれど、次の瞬間テ
レビに映った猫を見て、『ぎゃ！』と声を上げていた。

「……………絵画、絵画はねー、まずこの海がすごいと思うの。
神秘的なのに、それでいてお母さんみたいにあったかいかんじがす
るよね。あと私はこの黄色い、とろけそうな、ホットケーキのバタ
ーみたいな月も綺麗だと思うなあ」

『お、おお、わかるか瞳子ー！さすがオレの所有者の娘だ！』

もつと褒めるとふんぞり返る絵画に、私は空が綺麗とか、やつぱ
り青色がいいとか、いつもの倍くらい丁寧に絵画を褒める。

『ふふん、さすがオレ、あのぐにやぐにやどもにもこの美しさを悟
らせてしまったんだな！』

満足そうに笑う絵画を見て、私は引き攣った笑いを浮かべた。

——明日知人のねこちゃんあずかるの、絵画にはまだ黙っておこ
うかな……。

ねこ（後書き）

拍手お礼なのにローテーション早いよ！と思いながらも、なぜか書きたくなってしまったので更新です。このように今後も気まぐれに更新したり停滞したりすると思われます。

拍手も更新しました！よろしければそちらもどうぞ。そして感想や突っ込みなどをいただけるととてもうれしいです。

読んでくださってありがとうございます！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0276y/>

瞳子の日常

2011年11月18日03時19分発行